

heisei16

# 六花

*Rikukwa haikukai*

4

晦日そば kuragari ni negi hiitekishi misoka soba  
初景色 umi wo ume yama wo kezurit e hatsugesiki  
如月 kisaragi ya kaseki ni narishi sakana kana  
蝶 une tsukuru saki he saki he to haru no cho  
凧 ohdako no orikite kusa no iro to naru  
夕桜 hahani yu wo tsukahasini yuku yuuzakura  
盆の月 bon no tsuki haha no ko to shite furo wo taku  
暑 raomen to ihujiga atsushi tenmabashi  
メロン ami nadoni tojikomori iru melon kana  
暑さ kono atsusa jazz ni arrange shite mimuka  
金魚 urenokoru mizu wo ninahi te kingyo uri  
柿 kaki tawawa tsuma no egao wo ryouyaku ni

*designed by Asuka*

訪戴



山田六甲

じゅんじゅんと鳴く雀たち寒の明け  
おつぱいは男にもあり花辛夷  
桃の花抽斗閉めし匂ひかな  
啓蟄や兄は祖父似の暴れ者  
読めぬ字と闘うてをり春の昼  
筆に身を立てたる人や養花天

夜半とは蕪村と後藤花の滝  
引き返し南画に見入る春の闇  
大誤植して心地よき沈丁花  
芹の水なめて主人に戻る犬  
くつ付いて上がる茶托や梅花祭  
のれそれを箸汚しにと出されけり  
焼きそばに春の風邪ひく女かな  
マヨネーズに醤油たらせば春になる  
串刺しにされても鳥の恋とげし  
弥生くる辛抱強く弟子待てば

六 郷 集

冬野中

鳴 海 清 美

耳 た ぶ に 祝 杯 の 酔 冬 野 中  
生 垣 の ひ と 株 刈 ら れ 冬 の 鶉  
枯 芦 や 和 歌 の 浦 風 能 弁 に  
鏡 冷 ゆ 百 面 相 を し て み た る  
薄 墨 の 記 憶 を 五 つ 十 二 月

囀

中 村 房 枝

エープリルフルがんがん笑ふかな  
囀 や お 箸 を 使 ふ 国 に ゐ て  
観 音 の 肌 に 日 の さ す 花 ゆ す ら  
お 彼 岸 や 端 を 重 ね て 屋 根 瓦  
筍 の 藪 に 入 り 行 く ハ イ ヒ ー ル

方 程 式

松 山 律 子

ラッピング変えてホワイトデーのお返しに  
星のウインク春が来たのを知らせてる  
子雀にも別れの時はきつと来る  
猫の仔の恋に方程式なんてない  
春の選抜打たれることも野球だろ

根 深

二 瓶 洋 子

七キロの一冬分の根深買ふ  
向ひ家の聖樹点滅する玻璃戸  
中年が里の初湯を称へけり  
寒鴉群の時 是 城 の 森  
鏡餅切りてしきたり断ちにけり

# 物干しの竿拭いてゐる養花天

宮森

毅

日当たりの優しく見ゆる寒の入り

マンシヨンの表と裏の猫の恋

恋猫や人の気配は視野の外

傷つきし顔そむけたる猫の春

養花天とは花曇の傍題だが、半晴半陰の状態で、まことに桜を咲かせるための天候という気分がただよ。春の季節現象をこのように美しく言いとめた先達に感謝。さて、この句、この季節の主婦の日常をまことに上手くとらえて見事。私がかかわざ解説をしなくても充分に味わっていただけの秀句。もしこの句が「つちふる」などと言つたらだめなのはご理解いただけよう。「養花天」としてすこし離れた手柄。

# 橙木集

同人自選

順不同

草堂斬西無樹林

非子誰復見幽心

飽聞橙木三年大

与到溪辺十畝陰

杜甫

鳥帰る

水谷ひさ江

鳥帰る此処は丹波の分水嶺

鳥帰る数多の人の頭上へて

帰る鳥淀川渡り終へぬあり

放言の後の虚や鳥雲に

鳥帰る見知らぬ国の地図貫ひ

猫の恋

宮森

毅

日当りの優しく見ゆる寒の入り

物干しの竿拭いてゐる養花天

マンションの表と裏の猫の恋

恋猫や人の気配は視野の外

傷つきし顔そむけたる猫の春

イヤリング

物江

昌子

山茶花

市川伊團次

イヤリング似合ふと言はれ賀状書く  
今吐きし言葉拾へず冬の月  
出張の土産に風邪を持ち帰へる  
メールより声の聞きたしクリスマス  
クレープのクリームホワイトクリスマス

店屋物混ぜて食積五段なる  
夜を訪うて薄紅色の冬薔薇  
鏡割欠片ひとつを貰ひ受け  
善哉にお餅をひとつ沈めをり  
一輪の山茶花コップに活けてあり

寒椿

池崎るり子

オーストラリアにて

岩松

八重

震降る地震より九年過ぎにけり  
九年過ぐ震度七なり寒椿  
恵方道キイホルダーのハートかな  
親子ざる新春飾る花時計  
注連飾り牛舎の朝の牛の声

降りたちてここは真夏のクリスマス  
爽やかやカメラ目線のコアラ抱く  
日本とは角度のちがふオリオン座  
夏王海ウエディングドレスはためかす  
花嫁の白きリムジン夏の風

# 六花集

平居 滯子

会員自選

滝行者氷の衣着て横切る  
杉道も獣の道も雪の下  
修験道番外の山雪深し  
六甲を背負ふ洋館冴返る  
一病を得てより日々のあたたかし

林 裕美子

中谷喜美子

初詣合掌長き夫を待つ  
兄弟の一つふとんに眠たがる  
人は四角の容れ物に棲み冬うらら  
姫始わたし小さな珠になる  
縁側のおひるごはんや春近し

さりげなく湯宿の誘ひ年賀状  
たわいない秘密をひとつ初化粧  
昆布巻きの帯のほどけて三日かな  
トーストを半分残し初仕事  
余り餅焼いて正月明けとせむ

# 菜根譚



## 六甲

人は四角の容れ物に棲み冬うらら 林裕美子

古代に、人間が住処としたのは四角ではなく、岩穴や、円錐形のような茅葺きのものであったろう。いつの頃にか、人は箱形の建物に棲むようになった。のち近代から現代に至っては、まさに容器のような住処を選ぶようになった。しかも、自然の素材を生かしているとは言い難い、コンクリートで固めた入れ物である。そんなところに棲んで暮らすと云えるだろうか、と嘆く作者か。「四角の容れ物に棲み」がこの句の眼目であり、冬うららには少し皮肉が込められているようにも思える。

修験道番外の山雪深し 平居 濤子

修験道のことはよく分からないが、なんでも役小角（えんのおずぬ）を祖と仰ぐ日本仏教の一派らしい。日本古来の山岳信仰に基づくもので、山中の修行による呪力の獲得を目的としたが、後世の教義では、自然との一体化による即身成仏を重視するらしい。

関西では大峰山が有名で、もしかしたらそれ以外の山を番外の山と呼んでいるのかも知れぬが、「番外の」がこの句の眼目。但し、「雪深し」には少し理屈（番外で人があまり入らない山ということ）が見える。